

# 英語教師のための コーパス入門

## 最終回

### コーパスを 自己研修に活用する



明海大学 助教授  
投野 由紀夫

いよいよ最終回になった。今まで5回にわたり、比較的入手しやすい英語コーパスとその使い方を紹介しながら、コーパスを利用すると何がかわるのか、どういった点で有益なのか、を具体的に紹介してきた。第1回の連載の際に、私が取り上げたコーパス利用の効能を再度列挙してみよう:

- ① 用例観が変わる
- ② 文法観が変わる
- ③ 英語の変種への認識が変わる
- ④ ネイティブに対する劣等感が変わる
- ⑤ 役に立つ表現への姿勢が変わる
- ⑥ 学習事項に対する見方が変わる
- ⑦ 学習者の英語力観が変わる

これらの変化は、英語教師の言語に対する見方や学習に対する見方を根本的に変える可能性を持っている。そしてそのような変化を遂げた英語教師は、教える対象である英語に対してより柔軟な姿勢をもち、また指導の方法や介入の仕方にも従来と違ったアプローチをとれるようになるかもしれない。そういった意味で、コーパスは自己研修と結びつく。私はその部分をクローズアップして、最終回として、英語教員が自己を磨くために英語と向き合っていく姿勢の中で、コーパスの使用がどのような利点があるか考えてみたい。

#### ■ 事例1

#### 英語の語法研究が趣味のS氏

私が親しくしている英語教師のS氏はとにかくよく英文を読む人である。研究会などで会うたびに、カバンに英字新聞がちよいと顔を出している。彼は私と電車で帰ったりすると、英字新聞の切れ端を取り出して私にそれを見せる。「投野先生、これはどういう意味ですかね?」とか「こういう形容詞の修飾のしかたは珍しいですよ?」といった風

に、英語の語法・用法に関するいろいろな疑問を持っていてそれを私に実に楽しそうに尋ねるのだ。また彼は毎日英字新聞の社説を朝の電車で1本熟読し、帰りの電車ではそこから知らなかった英単語10個をメモ用紙に書いて覚え、家に帰ると辞書を引いて例文を探してそれを音読するというようなことを欠かさずやっている。彼はそれでも別にエリートの進学校を教えているのでもなく、普通の平凡な中学教師である。自己研鑽に対する姿勢は実に見上げたもので頭が下がるのである。

「Sさん、語法に興味があるならばコーパスを自分で調べてみたらどうですか?」私は、ある時彼にこういって、British National Corpusの on-line serviceを紹介した。数日後、彼は少し興奮気味に、「投野先生、あれはいいですね。気になることがあって調べてみたら、辞典ではお手上げだった用例がちゃんと見つかりました。」と言った。詳しく聞いてみると、たった50例しか出てこないサービスなのに、50回くらい検索を繰り返しているいろいろな例文を読んだ結果だという。一晩で2500もの例文に目を通すという経験を彼はしたのだ。英語に接することが英語力を高める自己研修の一部であるならば、S氏のコーパス・データのスキニングはかなりの効果だろうと思う。

彼はその後、BNCがCDで利用可能になると、それをラップトップに入れて、主要な英英辞典のCD-ROM版と一緒に辞典代わりに持ち歩き、疑問があればすぐに検索しているようだ。「英英辞典も電子辞書だと全文検索などできるようになって便利なのですが、コーパスをじかに検索したほうが実際の使用状況はよくわかりますよね。」と言う。特にS氏は、中学の授業で生徒から発せられる素朴な疑問を大切にしているようだ。「よく落ちこぼれの生徒が pattern practiceなどをやると言うんですよ。「Yes. とか No. って言うだけでいいじゃん。なんでもう一度全部同じこと繰り返すの?」ってね。実際にコーパスで検索してみると、Yeah.とか

Right. みたいな応え方が圧倒的に多い。short answers は決してわるくない、と思いました。聞き取れているから答えられるんですからね。」とS氏は言っていた。機械的な反復ドリルも確かにそれなりに効果があるが、実際の言語使用の実態に即して指導すれば、余計なところで落ちこぼれを作らなくても済むのかもしれない。

S氏は、最近はおそらくいろいろなテキストをインターネットからダウンロードして自分独自のコーパスを作っているそうである。その規模は1億語のBNCの数倍になろうというから凄まじい。S氏から私が学べることはいろいろある。有限の辞典情報に比べて、未整理であるが無限の可能性を感じさせるコーパス収集。そこから垣間見る英語の宇宙を、英語教師はもっと自由に自らの力で遊泳してもいいのではないだろうか。

## ■ 事例2 コーパスを駆使してライティングを極めるD氏

最近、講演に行って高校で教えている一人の先生に面白い話を聞いた。その人(仮にD氏と呼ぼう)は、自分のライティングの授業で和文英訳をやらせている。ここまでは別にどこにでもある平凡な授業なのかなあと思わせるだけなのだが、D氏はそこから出発して独自の工夫を凝らしている。まずライティングの授業でやらせる和文英訳を自分で実際に英訳してみる。それだけではない。自分が書いた英文以外に生徒が書きそうな異なる言い回しを含んだ英語表現を思いっくだけ書き出してみるのだそうだ。「こうすることで、生徒が書きそうな文のパターンがある程度網羅できるんです。それから自分で確実にOKだというものと、ボーダーラインのものを分けます。この後が大変なんです…」笑いながら言うD氏。一体何をするのかと思いきや、ここからが半端でなく面白い。彼は自分が分類した英訳例を頼りにCOBUILD

Direct を利用して、自分が書き並べた英語表現のうちどれが実際に可能か、どれが表現としてはコーパスに出てこないか、といったことをチェックし、1つ1つの例文にそういったラベルを付けてデータベース化しているのだ。「この作業は大変なのですが、基本的な文型や表現に関して自分で勉強しながらデータベースを作りますから、英語力は非常につきますね。」とD氏。1冊の英作文のテキストをもとに彼が作り出す英文の数はおそらくその5倍から10倍になろう。1つ1つ作った英文をコーパス・データに照らして吟味するから、こうも言えるああも言える、という表現のヴァリエーションや語感などに関するセンスも磨かれてくる。また自分自身の研修というだけでなく、授業にもこのデータの積み重ねは大きな威力を発揮するはずだ。個々の例文に関して、コーパス・データを反映して、この表現はよく使うとかこういう言い方はあまりしない、といった使用状況がわかるのだから、コツコツそういったリソースを作っておけば一生の財産になるに違いない。

\* \* \* \*

これら2つの事例は自分の英語力を磨くためにコーパス・データを駆使している例であった。確かにペーパーバックなど一つながりの読み物を読むことは英語力増強に大きな効果がある。しかし、それ以外にS氏のように英語の構造に関する旺盛な探究心やD氏のように1つの表現に関して自分の英語力を最大限に使って言語感覚を研ぎ澄ますような機会を自らに課すなど、自己研修に励む人というのは何かしら他人がやらないようなトレーニングの工夫を凝らしている。またコーパスが実際にどのように使われるかを確認するという意味でその道標、ガイド役になっているところが面白い。

自己研修といっても英語力を鍛えるだけが研修ではない。専門的知識を身に付けて、教材開発など日々の教育実践に工夫を凝らすのもまた

研修である。そのような事例を見てみよう。

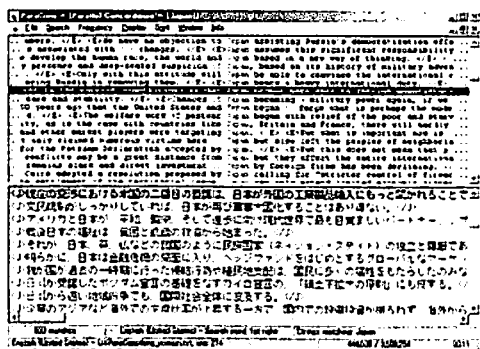
### 事例3 パラレル・コーパスを用いた独自教材の開発をするY氏

Y氏はやはり高校の先生でライティング指導に関心がある。しかし、大学入試問題のような和文英訳の無味乾燥さに嫌気がさし、また、片言で言い合うだけのオーラル・コミュニケーションの指導にも疑問を感じて、独自に日英対訳コーパスを作りながら、日々生徒が興味を持ってそうなライティングのトピックに使えるような対訳データをインプットしている。

Y氏の作業日はいつも土曜日。Asahi.comから毎週3回配信される日英対照の「天声人語」のメールマガジンを整理するのが1日の始まり。そして1週間分の記事に目を通しながら、そのコラムのトピックと記事のレベルを自分なりに評価してファイルに記入しておく。Y氏は言う。「『天声人語』は大学生のとき、英文解釈の授業で読まれたんですよ。最初は面倒くさかったんですが、徐々に日本語と英語の表現の微妙なニュアンスの違いなどを先生に解説してもらって興味が湧き、自分でもその授業が終わりになっても毎週読み比べてはいい表現をノートに整理したりしていました。」

このようなY氏の日英対訳データ収集のエピソードを聞いて、私もコーパス作成の経験からいろいろアドバイス、意気投合することができた。その後彼は猛然とデータ収集に打ち込むようになる。土曜日に家族サービス以外は、ありとあらゆる対訳データを時間を割いて自分のパソコンに入力しているそうである。市販の日常会話表現の英会話本の例文をコツコツ入れているし、英英辞典の例文もCDなどから面白いと思うとコピーしては例文集に加えて、日本語訳をつけて保存しているそうだ。その用例数はもう数十万件に及ぶらしい。

これらの教材を用いて、Y氏が開発しようと思っているのが、「英作文支援システム」とでも言えるようなもの。書きたいジャンルのトピックを選択すると、それに関連する日英対訳のウィンドウがポップアップして、自分が言いたい日本語表現に対応する英語表現が平行で表示される。学習者はそこから適切な表現を読み取り、選択して作文に活かす、というような仕組みである。「天声人語」のように一連の文章になっているようなデータもあれば、会話集のようにブツ切れの文脈のない例文集もある。コーパスとしてはかなり雑多なもののだが、Y氏の選択眼を経た上で掲載されている例文データである、という点で教育的価値が高いと言えよう。



筆者の日英パラレル・コーパスの例  
(読売新聞とDaily Yomiuriの対訳データに基づく)

#### 事例4 教科書をコーパスによりどんどん膨らませるM氏

もう1つ教材開発という側面での自己研修の例を見よう。M氏は中学教師15年目の中堅。教科書の中身をパソコンに入力して、教科書コーパスを作っている。M氏の発想が面白い。「教科書はいろいろ制限があるので使っていてあまり面白くないんですよ。それでいろいろな会話本や欧米のコースブックの中のダイアログとか参考になりそうなのをまぜこぜにして自分で教科書を作っちゃいます。たとえば教科書のあるレッスンが挨拶の場面だったら、手に入る挨拶の場面

のスキットとか表現をどんどんそのレッスンのダイアログの後に加えていくんです。そうやって、教科書コーパスに作り変えてしまうんです。」

1冊の教科書だけでは無味乾燥だとは誰しもが思う。巷の教師は教科書で教える、教科書しか教えられない、などと批判がある中、M氏の「教科書拡張政策」は十分に面白い。またそれを自らの手で教科書コーパスと称しているところがユニークだ。本物の教科書そのものを複数集めているわけではないが、レッスンや文法項目などで分類しながら自分好みの素材を収集して1つの教科書の中に加えていき、それをカスタマイズする、という「自分だけのサンシャイン」とか「自家製ニュー・ホライズン」ができる、というのもいいではないか。

### おわりに

今回は4人の先生の自己研修と、そこでコーパスの発想をいかにうまく活用しているかを見た。私は初回に言ったように、コーパスは「道具」であると心得ている。道具であるから、その使い方に習熟したいし、目的に合った選択をしたい。今回の連載がその一助となれば何よりである。コーパスは所詮道具なので、決して万能薬ではない。コーパスを使ったからと言って、英語力が自然と伸びるなどということはない。むしろ、道具を使ってどのような学習者の能力の側面にどのような処置を施すのか、といった医者のような、あるいは、トレーナーのような役割を我々英語教師が問われているのである。

個人的には学習者データをコツコツとコーパス化していき、将来は日本人英語学習者の習得の道筋なるものがある程度客観的に記述・説明できることを期待している。そのころには、おそらく一般の教室の中にコーパスが浸透しているかもしれない。その一助となれば望外の喜びである。